

白選五十一首



阿木津 英

いにしえの王のごと前髪を吹かれてあゆむ紫木蓮まで

〔紫木蓮まで・風舌〕
（一九七五—一九七九）

産むならば世界を産めよもの芽の湧き立つ森のさみどりのなか

唇をよせて言葉を放てどもわたしとあなたはわたしとあなた

心地よく生き得る範圍をまたひとつ叩き潰して出でて来にけり

天翔る言葉も魂たまもあらずけり水のほとりの自転車静か

厨くべに鳥賊の嘴ぬきにつつ阿部定などのことも過よりぬ

懷中にサックを携帯せし茂吉ふさ子を隠しきりし茂吉よ

この昼のわけのわからぬ悲しみを木の箸をもて選えり分けている

何びとにもあらざるわれは昼過ぎて蟬啼く声に濡れとおりおり

魂を拭えるごとく湯上りの湯気をまとえる乳をぬぐえり

地に萌えてさ揺らぐものをあさみどりなす網膜にさびしむわれは

歌集名の左に書いたのは、収めた歌のおおよその制作年代である。

『宇宙舞踏』以後、歌集になっていない今日までの八、九年間分は、今回も収録しなかつた。面倒だというものもあるが、恐ろしいから。

これまで歌集を四冊作つたが、そのたびに打ちのめされた。いっばし一人前になつたつもりで、意気揚揚、歌ノートを開くと、あわれやそこには残骸さかがばかり。目の前がまっくらになって、よろけるような思いで、それでも、これだけしかないのだからここから出発するしかないと言ひ聞かせ、ようやく気を取り直して、編集作業に入るのが常なのだ。そんな思いを、歌集を作るのでもないのに、したくない。

大いなる掌があらわれて土に咲く人間を摘みいるにあらざるや
男女にて棲むあわれさは共どもに瓢箪に呑み込まれるごとし
ぎしぎしの赤錆びて立つこの暑さ「家族」とはつね歪めるものを

〔天の鴉片〕
二九八〇—二九八三

下腹のあたりの透きてゆくような月たつまえの今日の肉叢
自己完成を第一義とせずなりし伊藤野枝そののち五度孕みき
鞆あめに天の錘りのごと揺るる小肉塊を子供といえり

柿の木のうちの力が朱に噴きて結びたりけるこずえこずえに
たいらけくひとしきという概念を大笑いせよ遠阿蘇の嶺

西ひくく光乱れている雲よ左太腿ふともものあたりが痒し

道端にも言うごとく燃殻もえがらが風にくたびも立ち上りいる

何ゆえにある乳房かや昼寒き町にきたりて楊枝もとを購む

たそがれのはくもくれんを嘴がみぎにひだりに裂きて啄む

理想が殺戮をすということを昨夜まぞ読みてよりのちのこころは

枇杷の木の下に踏みおりたりし今日のひと日の七八分間

夫婦は同居すべしまぐわいなすべしといずれの莫迦が掟てたりけむ

木に垂るる六つなる赤きからすうり鳥に食われて身を軽うせり

わが骨のうえの青草踏み踊れかくうたいしか古代老いびと

夢醒めて立ち出でつれば庭の木にひたきの腹のふくらみ赤し

ぬかるみに囚われているその種子の冠毛しろく吹かれやまらずも

今世紀終末にしてあがめらるる自然食品のごとくにおんな

〔白微光〕
二九八四—二九八六

八、九年間分というど、歌集出版のサイクルの短くなった昨今では、長い空白である。少なくとも、もう一冊くらいは出しておいてよかつたのだが、そうあせることもない。この頃は、何でも使い捨て、消費の感覚が支配しているけれど、詩歌の言葉ほど、消費ということから遠いものはない。読み捨てしようつたつて、できないものしか、詩歌とはいわないのだ。

読み捨てできない言葉のために、わたしは汗を流す。

『宇宙舞踏』だけは、旧仮名遣いになっている。ごく当然のように新仮名遣いで歌を始めたが、やっているうちに、新仮名遣いではどうにもサマにならないといった場面にしばしば遭遇する。たとえば、結句に「思う」では何とも軽々しいし、「しており」より「してをり」の方が美しいとつくづく羨ましくなる。そもそも文語をつかって新仮名というのがおかしいのである。理屈からいけば、旧仮名に軍配があがる。そこで、誘惑に堪えがたく、『宇宙舞踏』は旧仮名遣いをしてみたけれど、現在、いまひとつ全面転向には踏み切れないでいる。

(あきつ・えい 「牙」「あまだむ」)

公園の秋昏れがたの息吸えりわれはたのしく鼻翼を張りて
ゆきゆきて仰ぎたるわが電柱のフィラメントにともるあかりよ

この昼の憂い散ずと猿の絵のふくろつかみて立ち上りたり

樹の下のベンチに倚れるたましいは婦女おみなと生あれてくるしみをする

背におもき翼たためて立喰ひのうどんをこよひ啜りあげたり

さりながら囚ぼらはれびとは足勁くくんだりゆきたり白菊畑はたへ

小雨ふるゆふべ洞ほらなす豆腐屋に明るければか寄りゆくわれは

大いなる白き翼は襲ひ来よわが骨ぐみの鳴り出づるべく

だいもーん、だいもにおーん。アスファルトぬくきがうへのこころは念ず

ふゆ青きひかりただよふ畑土に群れてついはむ鋭とき嘴くちばしは

天に葉をかかぐる芋の青茎の入り乱れたり腐るるは土に

手繰りあぐる思ひのはてに浮く言葉おそるるなかれおそるるなかれ

春のあめ降り来るそらに棕櫚の葉はおのれうちひろぐ濡れてゆらぎて

如何ならむ膚のひびきの合はさりて生あれしか仰ぐ空の青さは

臍物のごとくわが手に裏つみたりヤマゴボウ黒き粒実の房を

獣けだものはほとほと来てみづ曇るそらへ嗚咽をはなちたりけり

化粧けはひして立ち上あがらむとつく膝ひざに大地のごとくわれ憊つかれたり

雲間より曠野あらのへひかり降くだり来つセイタカアワダチサウの穂絮あはに

秋夕べ遊歩をなすに顔のべに羽あるものの湧きのぼりくる

『宇宙舞踏』
（一九八六—一九九二）